

ロシア文学における生と死(その1) ドストエフスキー

2009年度夏 学術俯瞰講義

第7回 6/1

担当 沼野充義

(文学部 現代文芸論/スラヴ文学)



フョードル・ミハイロヴィチ・ ドストエフスキー

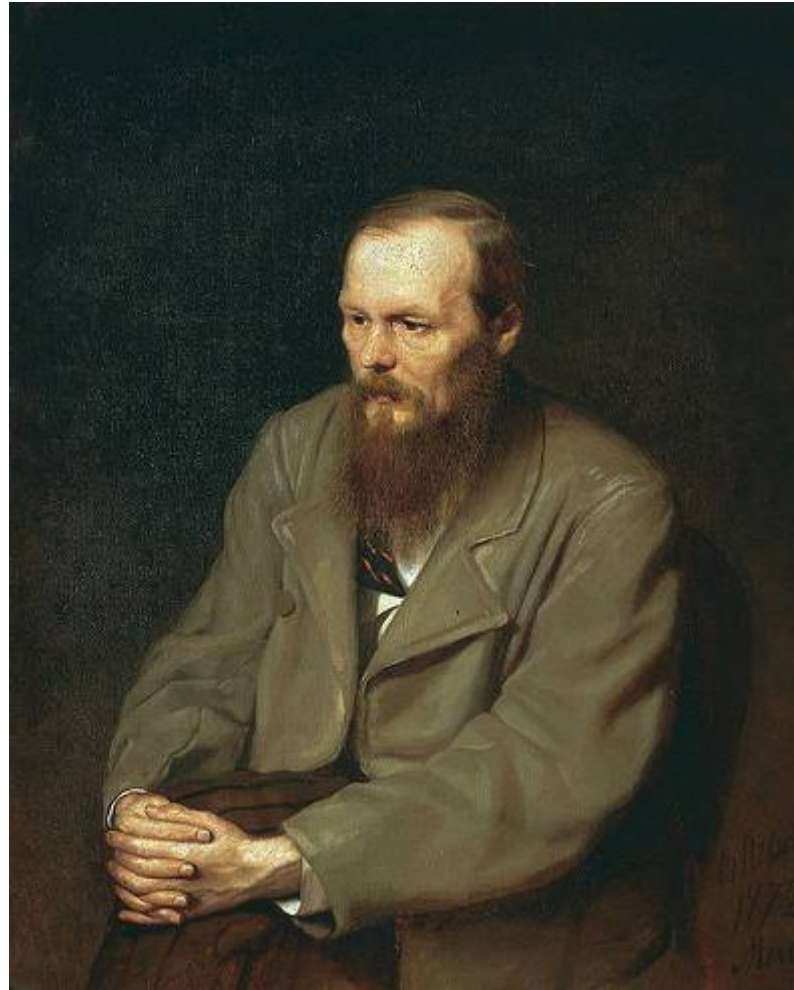
- Ф е д о р М и х а й л о в и ч
Д о с т о е в с к и й

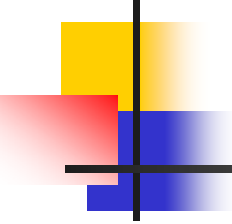
Fyodor(Fedor) Mikhailovich
Dosto(y)evsky

1821.10.30(文政4年)～

- 1881.1.28(明治14年)

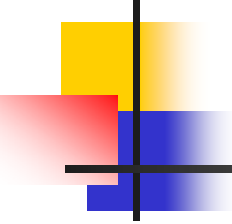
ワシーリイ・ペローフによる肖像画
(1872年) モスクワ、トレチヤコフ美術館所蔵





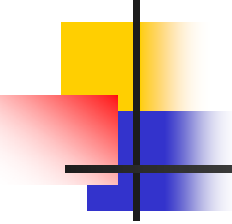
ドストエフスキーの生涯(1)

- 1821年 モスクワの慈善病院の次男として生まれる。
- 1838年 ペテルブルク陸軍中央工兵学校入学。
- 1839年 父が領地の農奴に殺害される。
- 1846年 処女作『貧しき人々』で華々しい作家デビュー。



ドストエフスキーの生涯(2)

- 1849年 社会主義者グループ「ペトラシェフスキー会」メンバーとともに逮捕され、シベリアのオムスクで懲役刑に。
- 1854年 出獄。
- 1859年 兵役解除となり、10年ぶりにペテルブルク帰還を許される。以後、作家活動を再開。
- 1861年 『死の家の記録』を発表。
- 1864年 『地下室の手記』を発表。



ドストエフスキーの生涯(3)

- 後期5大(4大)長編
- 『罪と罰』1866年
- 『白痴』1870年
- 『悪霊』1872年
- (『未成年』1875年)
- 『カラマーゾフの兄弟』1879～1880年
- 1881年1月28日死去。



死の原体験(1)

- 父が領地で農奴に殺害された事件(1839年6月)
(真相はいまだによくわかっていないが)
- →フロイトの有名な論文「ドストエフスキーと父親殺し」(1928年)
- 無意識のうちに持っている父親殺害の欲望(エディプス・コンプレックス)が実現したように感じ、自己処罰のため「てんかん」発作が起こるようになった、とする仮説(その後「病跡学」pathology的研究も行なわれたが、いまだに仮説の次元であり、批判も多い点に注意)



死の原体験(2)

- ・1849年、「ペトラシェフスキー事件」で逮捕され、12月ドストエフスキーを含む21名の被告が死刑判決を受ける。
- ・12月22日、セミョーノフスキイ練兵場に引き出され、銃殺刑執行寸前のところで、皇帝による恩赦の知らせが届き、死刑にかえて、4年間の懲役刑に処せられる。



死にとり憑かれた作家(1)

- ドストエフスキーの作品は、夥しい「異常な死」(殺人、自殺)に満ちている。
- 後期長編を例にとれば:
- 『罪と罰』
- 元大学生による金貸しの老婆殺害事件
- 『白痴』
- ヒロインのナスターシャ・フィリッポヴナが最後に殺害される。肺病のために死期が近いイッポリート青年。死刑囚の処刑の直前の瞬間について語るムイシュキン公爵。



死にとり憑かれた作家(2)

- 『悪霊』
- 革命家たちによるリンチ殺人事件、人神思想にとり憑かれた男や、陵辱された少女の自殺
- 『カラマーゾフの兄弟』
- カラマーゾフ家の父親殺害事件(書かれなかった続編では、皇帝(=国民の父)殺害の企てへ?)

死にとり憑かれた作家(3)

- 天国と地獄3部作ともいうべき後期の短編3つ
- 「ボボーク」お墓の中の死者たちの幻想的な会話。
- 「おとなしい女」自殺してしまった女をめぐる夫の思い。
- 「可笑しい男の夢」自殺しそこなって、夢の中で、ユートピアを訪れる男。



『罪と罰』を読む(1)

- 【あらすじ】小説の場所はドストエフスキーの同時代、つまり一八六〇年代のペテルブルク。主人公はラスコーリニコフという貧乏学生。
- この男は自分がナポレオンのような「選ばれた」天才だと信じ、そういう者にはくだらない他の人間を殺すことも許されるという考えにとりつかれ、金貸しの老婆を殺害してしまう。
- しかし、思いがけないことに彼は殺人の後で、激しい苦悩に陥り、最後にはついに自首してシベリアへの懲役刑に服する。そして彼を愛する心清らかな元娼婦のソーニャに支えられながら再生への道を歩み始める。



『罪と罰』を読む(2)

犯罪小説としての『罪と罰』

- この筋書きからも明らかのように、『罪と罰』は、主人公が殺人という大きな罪を犯し、捜査の手に追い詰められながら、自白に導かれていくという「犯罪小説」として読むことができる。つまり抽象的な哲学的小説では決してなく、意外に卑俗な都会の現実に基づいた「犯罪小説」の面を持つ。



『罪と罰』を読む(3)

『罪と罰』は「都市小説」でもある。

- ペテルブルクという町そのものを全面に打ち出した、近代的な「都市小説」の側面も持つ。ペテルブルク(正式にはサンクト・ペテルブルク)は、当時のロシア帝国の首都であり、モスクワと並ぶ大都会だった。ペテルブルクの日常を描くドストエフスキーは、酔っ払いや売春婦がたむろする街の卑俗な現実のまっただなかに降りていくことを恐れなかった。



『罪と罰』を読む(4)

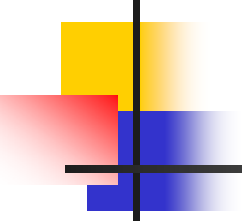
「踏み越える」と復活

- 殺人者となったラスコーリニコフは、ソーニャという女性の住まいを訪ね、彼女の部屋で聖書を読んでもらう。ここで取り上げられる「ラザロの復活」とは、新約聖書のヨハネによる福音書第11章に出てくるエピソードで、そこでは亡くなってしまったラザロという男が、イエスの力によって奇跡的に生き返り、イエスは「私は復活であり、命である。私を信じる者は死んでも生きる」と言う。
- ソーニャというヒロインは、貧しい家族の家計を支えるために自分の体を犠牲にして娼婦となったのだが、その行為は自分で自分を滅ぼすことに他ならない。
- ラスコーリニコフもソーニャも、人を滅ぼす罪を犯したという点では共通している。そこからどう復活することができるのか、というのがこの小説の重要な主題のひとつとして浮かび上がってくる。



『罪と罰』を読む(5)

- ロシア語の原題の意味
- Преступление и наказание (プレストゥプレーニエ・イ・ナカザーニエ) 英訳は “Crime and Punishment”
- 「罪」と訳されている「プレストゥプレーニエ」は語源的に「踏み越える」という意味。普通には「犯罪」を意味する(「罪」sinではなく)
- タイトルはひょっとしたら『犯罪と刑罰』と訳すべきなのか？



ソ連映画『罪と罰』
レフ・クリジャーノフ監督、1970年
(ラスコーリニコフ役：ゲオルギー・タラトルキン)

著作権上の都合により
ここに挿入されていた図表及び動画は
削除致しました



『カラマーゾフの兄弟』を読む(1)

- 【あらすじ】(あえて二言で言えば……)
- 好色な田舎の地主フォードル・カラマーゾフには、3人の息子たちがいる。情熱的な長男ドミトリー、冷徹な無神論者イワン、純粹な心を持つ敬虔な修道僧アレクセイ(アリョーシャ)。
- イワンはアリョーシャに自作の叙事詩「大審問官」を語って聞かせる。修道院ではアリョーシャの師、ゾシマ長老が亡くなるが、奇蹟は起こらず、遺体は腐って腐臭を放つ。
- 父フォードルと長男ドミトリーは、財産と一人の女をめぐり対立している。そしてフォードルが何者かに殺害され、ドミトリーに嫌疑がかかる。



『カラマーゾフの兄弟』を読む(2)

- 【あらすじ(続き)】
- しかし、フョードルを殺したのはカラマーゾフ家の下男(フョードルの私生児との噂がある)スメルジャコフだった。彼は「神も不死もなければすべてが許される」というイワンの思想を実践したまでだ、真犯人はイワンだ、と彼に告げる。
- スメルジャコフは首吊り自殺をし、半狂乱となったイワンは、法廷で真相を証言するが、聞き入れられず、ドミトリーは結局懲役20年の刑を受ける。
- アリョーシャはドミトリーに脱走計画を告げたあと、病気でなくなった少年イリューシャの葬儀に出向き、集まった少年たちは彼の言葉に感激して、「カラマーゾフ万歳！」と叫ぶ。



『カラマーゾフの兄弟』を読む(3)

「父親殺し」の問題

- ドストエフスキー自身の「原点」を踏まえている。また『死の家の記録』にも、遺産目当てで父親を殺した貴族出身の囚人のことが出てくる。
- 同時に、『カラマーゾフの兄弟』が全ロシアの縮図のような小宇宙であることを考えると、この「父親」を拡大解釈すると、「国民の父」、すなわち皇帝につながる可能性がある。



『カラマーゾフの兄弟』を読む(4)

『カラマーゾフの兄弟』の続編を構想する？

- ・ 序文にもあるように、ドストエフスキーは13年後のアリョーシャを中心に「第二の小説」(続編)を書くつもりだったが、果たせず亡くなった。
- ・ どのような小説になるはずだったのか？
- ・ ソ連のドストエフスキー学者グロスマンは「アリョーシャはアレクサンドル二世の暗殺計画に加わり、断頭台に登る」と推定している。
- ・ それを修正しながら、本格的に続編構想を展開したのが、亀山郁夫「『カラマーゾフの兄弟』続編を空想する」(光文社新書)



『カラマーズフの兄弟』を読む(5)

- イワンの「大審問官」
- 無神論者イワンの問題提起:「自分は神は認めるが、神の作ったこの世界は認めない」「神がいなければすべては許される」
- 叙事詩「大審問官」:16世紀スペイン、異端審問の時代を舞台に、大審問官と復活したキリストが対峙する。大審問官は「人間は自由の重荷に耐えられない生き物であり、自由と引き換えにパンを与えてくれる者に従うのだ」と主張する(→人間の自由、20世紀の全体主義の問題を予言するかのような問題提起)。
- 『カラマーズフの兄弟』における「父親殺し」とは――家庭の父―国家の父(皇帝)―人類の父(神)の3層を含んでいるのだろうか？



ソ連映画『カラマーゾフの兄弟』
イワン・ピリエフ監督(1968年)

著作権上の都合により
ここに挿入されていた図表及び動画は
削除致しました

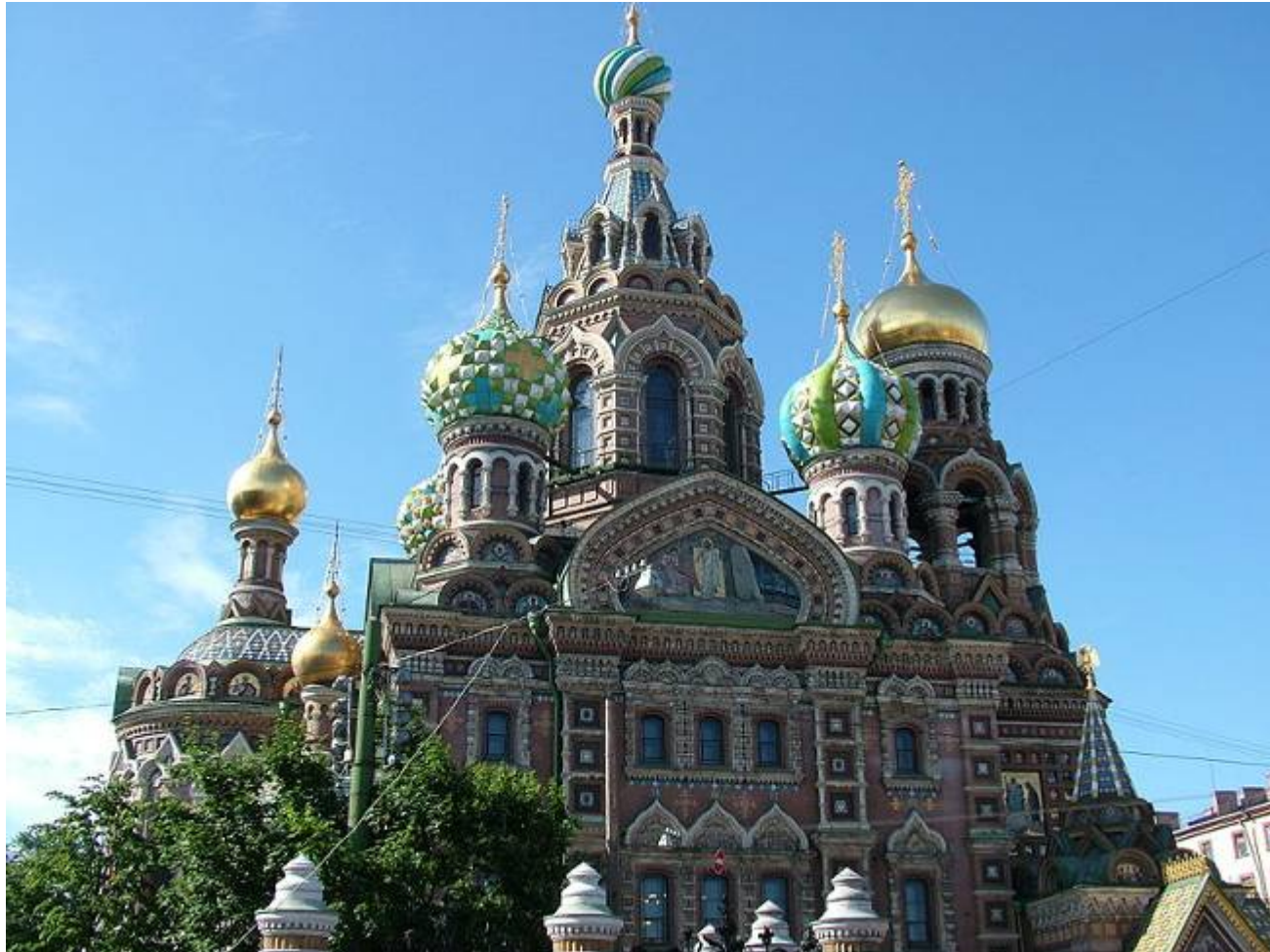


作家の死

ドストエフスキーの死の「謎」

- 1881年3月1日、ロシア皇帝、アレクサンドル2世が革命家によって暗殺された。
- ドストエフスキーはそのほんの一月ほど前、病気で亡くなった。しかし、彼が住んでいた建物の中の隣の住居には、皇帝の命を狙う「人民の意志」党のアジトがあり、テロリストたちがさかんに出入りしていたのだという。
- 現代ロシアの歴史小説家エドワード・ラジンスキー『アレクサンドル2世暗殺』（望月哲男・久野康彦訳）は、作家の死がひょっとしたらテロリストたちの活動と関係があるのではないか、という憶測を披露している（小説家の想像力ゆえの空想ではあるが…）

「血の上の救世主教会」С п а с н а к р о в и
(アレクサンドル2世暗殺の場所に建てられた)



ドストエフスキーの墓

ペテルブルク、アレクサンドル・ネフスキー大修道院内



しかし、死んでもなお生きている ドストエフスキー

『カラマーゾフの兄弟』新訳(亀山郁夫訳)が未曾有のベストセラーになったことからわかるように、ドストエフスキーは現代でもなお、作家として生きている。日本でいえば明治初期のものが、なぜいまでも読みつがれ、力を持ち続けているのか？

- 巨峰:『カラマーゾフの兄弟』はドストエフスキー最高最大の作品であり、トルストイの『戦争と平和』と並ぶ世界文学の巨峰。
- ここにはすべてがある——ここには愛と憎しみ、淫蕩と純潔、三角関係、金銭欲と殺人、悪と恥辱、無神論と敬虔な信仰といった、あらゆるものが詰まっており、その作品世界ははるか後に生きる私たちの生を完全に射程に入れている。
- 根源的な問題——この小説には、**生と死の根源的な問題**をぐっと手づかみにし、一度読者を虜にしたら離さない力が備わっている。二十世紀の洗練された文学には希薄になった文学本来の醍醐味が、強烈に感じられる。文学は本来こういう力を持つものだとして改めて教えてくれる。



日本の作家たちへの影響

- 埴谷雄高（『死霊』）
- 加賀乙彦（『宣告』）
- 高村薫（『照柿』）
- 大江健三郎（『さようなら、私の本よ』）
- 村上春樹「これまでの人生で巡り会ったもっとも重要な本」3冊に、自ら訳出した『グレート・ギャツビー』『ロング・グッドバイ』と共に『カラマーゾフの兄弟』を挙げる。
- 島田雅彦
- 鹿島田真希（『ゼロの王国』←『白痴』を踏まえた長編）
- 中村文則